よの子ちゃんと雑談

手羽崎 ささみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よの子ちゃんと雑談

【Nコード】

N0563X

【作者名】

手羽崎 ささみ

【あらすじ】

主人公の「俺」がよの子ちゃん、という女の子と話したあれやこれやの雑談小説。何でもない、つまらない、オチもない、三拍子揃ったゆるーい会話を繰り広げていきます。

…明るくて萌えっばい小説を書けるようになるのが、作者の目標です。

修学旅行のバスの中

今日は快晴、気分も上々。

修学旅行のバスの中、俺は目的地に着くまで眠っていたように、ひたすら眼を瞑っていた。

「ねえ、につきー。起きてる？」

隣の席からそんな声が聞こえてくると同時に、ぺしぺしと頭を叩かれる。

「起きてない」

「そっかー、起きてないか、それは残念だ。でもにつきーは寝ながらも会話が出来るみたいだね？　ねえお話ししようよ。暇だよ」

俺の頭を叩く強さをエスカレートさせながら、淡々と言う彼女は、大きな瞳をほとんど瞬きさせることなく起伏のない声音で言った。

彼女の名は、よの子ちゃん、という。

高校では同じクラスで、同じ部活で、同じ班で、今回のバスの席順は自由だが何だか流れで隣同士に座る事になってしまった女の子である

よく話すんだけど、未だに彼女の事はよく分からない。

「そうだ！　につきー、お菓子食べる!？」

よの子ちゃんは何を思ったか、寝ようとしている俺の口にいきなり煎餅を押し付けてきた。

「うぐっ、たっ、食べねえよ！　痛いだろ！　ちよっ、口切ったぞ、もう……!」

「あ、いらない？　そう…。ごめんね」

悪びれる事もなく、俺の口に押し付けた煎餅を自分で食べ始めるよの子ちゃん。

……やべえ、本気で意味が分からない。

何のつもりなんだろう。俺にお菓子をあげようとした、という体

裁を取った嫌がらせなんだろうか？ それにしてはちゃんと素直に謝るし、ていうか食うなよ。何事も無かったかのように食うなよ、それ。

彼女の意図を測りかねた俺は、とりあえずコミュニケーションを取ろうと試みた。

「……美味しいですか？」

「うんしよっぱい。鉄みたいな味がするよ」

「へえん、変わった煎餅だね。誰の血かな？ ……って、これ、今朝集合した駅で売ってたやつじゃないのか…？」

お土産用じゃないのかよ。きちんと包装された贈答用の高いやつじゃないか、これ。

「うん、美味しそうだったから。につきーは甘い物あんまり食べないからお煎餅好きかなーと思って」

「え……」

え。何これ。もしかして俺にあげる目的でわざわざバスに載る前に煎餅を購入したっていうのか。荷物になるのに。お菓子なんてコンビニで買えばいいだろ。何故にお土産用を早速食べるんだよ。

よの子ちゃんは、真っ黒い腰まで届く長い髪の毛先をいじりながら、眉上ぱつつんに切った前髪の下のこれまた真っ黒な大きな瞳で見つめてくる。

枝毛を探すような手付き（多分綺麗な髪だから枝毛なんかないけど）の指先から「もじもじ」という効果音を発しているかのようだった。

何だこれ。なんか食べないと悪い気がしてきた。

「一枚くれる？」

「え！ あ、うん良いよ！」

俺は余りお腹は空いていなかったが、煎餅の袋を破り食べ始めた。よの子ちゃんが嬉しそうににやにやしながら「たーんとおたべー」と言ってきた。鳩に餌やるおばさんか。

あつという間に煎餅を食べ終わった俺に、よの子ちゃんが話しかけてきた。

「につきーそろそろ眼が覚めた？」

俺は再び眼を瞑って答える。

「食べてる間は覚醒してた。悪いけど、また寝させてもらうからな。昨日あんまり寝てないんだ」

途端に、よの子ちゃんの目がきらきらした。

「え！ 本当？ につきーも！？ いやぁー実は、私も恥ずかしながら、修学旅行が楽しみすぎて眠れなかつたんだよ。明け方まで眼えギンギンしてたね！」

「俺は別に今日が楽しみで眠れなかつた訳じゃないからな！」

一緒にすんな！ 小学生かよ！

「……何で寝てないの？」

よの子ちゃんが可愛く首を傾げてきた。

「え、いや、それはその」

「なにになに？ 教えてよ。につきーの駄目人間ぶりは十分に知ってるから今さら何言われても驚かないよ」

「……ありがとっ、よの子ちゃんは俺の良い所も悪い所も全て受け入れてくれるんだね」

「うん、勿論だよ、ゴミ虫人間のにつきーでも私の大切な友達だからね」

すげえ釈然としない。

「で、何してたの？」

俺は視線を反らして答えた。

「……………ネットゲ」

「廃人？」

「流石に廃人にはなつてねーよ！ 勝手に嫌な言葉付け足すな！ 今日だってちゃんと学校行事に参加してるだろ！ 俺を可哀そうな人にすんなよ！」

「とにかく、俺は眠い。修学旅行をバスの中まで満喫出来る元気

もない。だから着くまで寝る。お休み……」

そして、俺は眼を瞑った。

そして沈黙。しかし、それも長くは続かない。

「あ、見て見て富士山が見えるよ！ ねえ！」

「嘘つけ。まだバスが出発してから二十分も経っていないのに俺たちの住んでるド田舎から東京に着く訳ねーだろが」

よの子ちゃんは何を思ったか、俺の髪を一本一本引き抜き始めた。

「なんだぁー起きてたんだー」

ぶちぶち。

「お前がうるさいから眠れないんですが」

ぶちぶちぶち。

ていうか痛い！ 抜くなよ人の毛髪！

よの子ちゃんはようやく俺の髪の毛を抜く手を止め（怒らない俺は心が広いと思う）笑顔で言った。

「につきー。眠れない時は羊を数えるんだよ。よし、私が数えてあげるね。につきーはリラックスしてイメージしてみて」

羊？ 確かに、眠れない時は羊を数えるというのはよく聞く。効

果のほどは知れないが、誰でも一度はやった事があるだろう。

ていうか、ここで駄目って言ったなら、余計騒ぐんだろっな。

「……ん。分かった、なるだけ静かに頼む」

俺が頼むと、よの子ちゃんは満足そうにならずいて、囁くような声を出し始めた。

「羊が一匹… 羊が二匹…」

俺は広い牧場に、もこもこした羊が一匹ずつ柵を飛び越えていく様子を想像した。

「羊が三匹… 羊が四匹…」

よの子ちゃんの囁き声は、甘く耳に絡みつくような声だった。

……いつもこのくらい静かにしてれば可愛いのに。

「羊が五匹… 羊が六匹…」

瞼の裏では、のどかな草原と温かな日差しのもと、だんだん羊は増えていき、めえめえと眠そうな声で鳴く。

少しづつ身体が重くなり、眠くなってきた。

「羊が七匹… ヤギも一匹…」

…………… 山羊…？

「羊が八匹… 羊が九匹…」

…………… やぎは？

「羊が十匹… ヤギがもう二匹増えて…」

…………… なんだこれ。

「ガチヨウが何匹か加わり、動物たちの脚は合計で七十本になりました。さあガチヨウは何匹加わったのでしょうか…？」

……………

「…………… 九匹？」

よの子ちゃんは両手を口に添えてにやにやしている。

「ピンポーン。だ〜いせ〜いか〜い」

「眠れねえよっっ!!」

鶴亀算なんて久々にやったよ！（ていうか羊と山羊の数が分つて
る時点で問題になってないけど！）

そんな感じで、俺の修学旅行はスタートした。

パーキングエリアで休憩

「わぁー。見て見てにつきー、東京スカイツリーだぁーっ！」

「あれはただの送電鉄塔だよ、よの子ちゃん」

俺たちの乗ったバスは、高速道路の途中にあるパーキングエリアで休憩時間に入っていた。

道路脇に建つ大きな灰色の鉄塔を指差しながら、無邪気に笑うよの子ちゃん。

「あそこから日本中のテレビに地デジの電波が流れているんだね」

「いやいや、近くのご家庭に電力を供給してるだけなんじゃないかな」

「やだなぁーにつきー、話題のスカイツリーがそんなしよぼい役目しか果たしてない訳ないよ。もう、お馬鹿だなぁ。ちゃんと新聞とか読んでるの？」

「……もう俺はお馬鹿で良いや」

よの子ちゃんは座席から立ち上がりニヤニヤしながら僕を振り返った。

「につきーはトイレ行かないの？ この先休憩ないよ」

「俺は良いよ。睡眠不足のせいで立ち上がる体力すらない」

「ネットゲの中ではHPの高さが武器の僧侶なのにね」

ほっとけよ！

「ねえ、一人でバス降りるのやだよー。みんな群がって降りてるんだよー。トイレ一緒に行こー」

よの子ちゃんは俺の制服の袖をひっぱり、無理やり立たせようとする。

「あぁーもう、HPないって言ってるだろ」

「……ザっ、……ザオリクっ！」

いや、死んではいけないからな！

よの子ちゃんが騒ぐと周りのみんなに迷惑がかかるかも知れない。ていうか場合によってはおれも怒られるかも。

「仕方ないな、俺はお土産でも見てるから、さっさと済ませてくるんだぞ？」

「はいはい！」

そう返事をして、彼女は勢いよくたんたんつ、とバスのステップを降りて行った。

嬉しそうにしているよの子ちゃんだが、ここではたと疑問に思う。連れションには普通女友達を誘うものじゃないのか？

……友達いな、いや！ そんなことないよな！

彼女だって部活の連中とは普通に仲良くしてるし！

俺とよの子ちゃんは、自販機の並ぶお土産屋の前で一旦別れて、俺は一人、食堂も兼ねたお土産屋の中へ入って行った。

お土産コーナーを冷やかしてから、まるで駅のキオスクみたいにかじんまりとしたお菓子や弁当を売ってる一角へ寄った。

「……煎餅のお返しでも買ってやるかな」

よの子ちゃんて何が好きだっけ？

女の子だからやっぱり甘い物か？

悩んだ挙句、俺は「コラーゲン入り」と書かれた酸っぱそうなグミを手取る。OLのバッグにでも入っていきそうなキラキラしたパッケージで買うのがちょっと恥ずかしい。うーん何味が良いかな。ピーチとブドウを両手に取って思案する。よの子ちゃん戻ってきたから何味が良いか訊こうかな？

あれ、そういえば遅いな……

遅いのを心配して俺は入口の方を振り返る。

「……っ！ うおおっ！」

すぐ真後ろに、よの子ちゃんが仁王立ちしていた。

またもやニヤニヤしている。

「……何してるの」

よの子ちゃんの顔が、眼と鼻の先にある。彼女の呼吸する息が顔

にかかると感じられるくらい近い。

近いつて。

「お肌に良さげな女子っぽいお菓子を手に『どっちが良いかしら』と言いたげな顔で悩むにつきーを観察して楽しんでいたの」

そんな、誤解だ、俺が食べたいんじゃないのに。

「コラーゲンは良いよね。につきーも美肌に憧れていたんだね。

そのグミは手軽にビタミンとコラーゲンが取れる女の子に大人気のお菓子だよ」

「へえそっか、詳しいね。よの子ちゃんもこれ好き？」

「あんまり」

……がーん。

コラーゲンってさあ、と、よの子ちゃんが切り出す。

「お肌の水分を保持するとかって、基礎化粧品とか食品に取り入れられているんだけど、実は落とし穴があってね」

「うん？」

よの子ちゃんはがっかりするような蘊蓄に詳しい。

またぞろそういう話だろうな、と思いつつ黙って聞く。

「化粧水やパックに入ってるものは意味ないんだって。コラーゲンは分子が大きくて毛穴からは絶対に浸透しないから口径摂取するしかない！……なんだって！」

彼女は仁王立ちのままドヤ顔をした。

「じゃあ、このグミは一応効果あるってことだね」

俺はポジティブにとらえて言葉を返し、結局ピーチ味の美肌グミと、よの子ちゃんが選んだお菓子を三つも買ってあげて（やっぱり俺は心が広いと思う）、二人でバスへ戻る事にした。

そろそろ休憩時間が終わるからか、パーキングエリア内は一直線にバスへ戻ろうとする生徒がわらわらとひしめいていた。

その中を二人並んで歩いていると、よの子ちゃんがさっきの送電鉄塔を指差した。

「につきー、あれ何だっけ？ さつき言っただけど、ド忘れしちゃった！」

「ああ、あれ？ 東京スカイツリーですか？」

「え？ 何？ 聞こえない！」

「だから東京スカイツリーなんだから！ あれ」

周りは学生たちのお喋りでざわざわしていた。よの子ちゃんは耳に手を当てて申し訳なさそうな顔で、騒音を掻き分けるように叫ぶ。

「あー、ごめん聞こえない！ もっかい言って、あれ何？」

「東・京・スカイツリー！」

よの子ちゃんに負けじと、指を指しながら思わず大声で言った俺の周囲から、くすくすと失笑が漏れてきた。

「ええ〜？ につきー何言ってるのー、あれただの送電鉄塔に決まってるじゃーん。やっただ恥ずかしい〜」

……あれ？

「あれがスカイツリーな訳ないって。まったく無知だなあー。まだ東京にも着いてないのに、よっぽど楽しみなんだね〜」

周りの生徒たちの中には同じクラスの奴らも交じっている。

ぶぷつ、あいつアホかよ

そんな声が聞こえてきたような気がした。

きつと空耳ではない。

目の前の彼女は、長い髪をくるくると人指し指に巻きつけながらニヤニヤ笑っている。

「いやっ、違っ！ 俺はあれがスカイツリーだなんて思っただけぞ！ よの子ちゃんが頑なに言い張るから……」

「え？ 言っただけよ。自分の勘違いを人のせいにしちゃって。

その器の小ささが余計恥ずかしいよ」

俺は赤面する顔を抑えて早足でバスへ向かった。

「さつき買ったお菓子やらねーからなっ！」

「ええー！？ 酷い！ ケチ！ 馬鹿！ 美肌僧侶！」

美肌僧侶ってなんか一番厭だ！！

休憩中怪我人が出てしまいました

俊敏なよの子ちゃんの手から、先程買ったお菓子を死守しつつ座席へと戻ると、見慣れた顔が待っていた。

「あ……、錦君……」

窓側のよの子ちゃんの席、その隣の廊下側の俺の席、そのさらに隣、俺の椅子の横にある補助席を出して、ちよこんと座っていたのはふわっとした内巻きボブのやたら細い女の子。

「もっちーだ!!! わーー!!」

よの子ちゃんが狭い通路で無理やり俺を追い越して、もっちーと森乃ちゃんに駆け寄った。

……「わーー!!」じゃねえよ。

よの子ちゃんは懐に手を入れてサツ! と平たい物を取りだす。

「もっちー! お菓子食べ ……」

「ストープ! いきなり食わせるんじゃないっ!」

俺は煎餅を持ったよの子ちゃんの手首を掴んで制止し、そのまま肩に手を掛け、奥の窓側の椅子に押しこむように座らせた。

「ぎゃーー!!」

大袈裟に叫ぶよの子ちゃんと、そんなやり取りを見て苦笑いする森乃ちゃん。

俺は森乃ちゃんに向き直る。

「さて、どうしたの? 森乃ちゃん」

と、言いながら、俺は森乃ちゃんの膝から真っ赤な血が流れている事に気が付く。

「う、うんっ、あのね、実は、さっき、バス降りるとき、転んじやって……」

森乃ちゃんは口元に手を当てながら顔を赤くして答えた。

彼女は別に恥ずかしい事をしている訳でも何でもないのだが、元

々引つ込み思案なので、誰かと会話するだけでこのように赤面してしまうのである。

森乃ちゃんは見ためどおり、体力がないらしく、ちよくちよく体調を崩しては俺に付き添ってもらって保健室へ行く。

しかしそれ以上に、ぼーっとしているせいか不注意による怪我の方が多く、何も無い所で転んだり、調理実習で手を切ったり、通路で自転車に轢かれたりするのだ。

俺は廊下にしゃがみ込んで膝を見ながら尋ねる。

「傷口は、洗った？」

「ううん、降りてすぐ転んじゃったから、痛くて水道まで歩けなくて……。何とか席まで戻って来たの」

「うう、いたそー。また派手に擦り剥いたね……。さあ出番だよ

“万年保健委員”につきー！」

よの子ちゃんは、びしっ！ と、前方の座席を指差し、俺に出勤命令を下す。運転席の真後ろ、担任の先生の席まで行き、救急箱を取りに行けと云うことだ。

そう、よの子ちゃんの言うとおり、俺は実は一年の頃からずっとクラスの保健委員で、そのうえ三年生と云う事もあり、保健委員会では副委員長という役職も務めているのだ。

保健委員をしているのはじゃんけんで負けたからとか云う、「やる気のない主人公」ばい理由からではない。驚くなかれ、俺が立候補したからで、

理由だつて至極まっとうなんだ。

「錦君、その、いつも迷惑掛けて、ごめんなさい……」

「もっちー……」

「迷惑なんかじゃないって、怪我してんだから遠慮すんなよ」

「さすがにつきー。一見馬鹿そうなのに実は医学部志望の医者家系」

「赤点常連のよの子ちゃんに馬鹿そうとか言われたくないんだけどな……」

家系とか、本当は重荷なんだけど。

怪我してる人を放っておけないのは、昔からの性分だ。保健委員になるのと医学部へ行く事はあんまり関係がないし、何の経験にもならない。しかし、先程言った通り、怪我した人や具合悪そうな人を見過ごせないのだ、俺は。

「あ、ちよつと待った」

救急箱を取りに行こうとした俺の背に、よの子ちゃんが思い出したように声を掛けた。

振りかえると、不思議とよの子ちゃんはいつものお気楽そうななやにや顔ではなく、少し暗い目をしていた。

「につきー。私急にバス酔いしてきたからから、ついでにビニール袋と水と酔い止めと浅田飴と、それから先生に私の病状をしっかりと報告し、高速道路だけど窓を開けても良いですか？ って聞いてきて」

え……？ バス酔い？ 何だよ急に沢山用を言いつけて。

「さつきまでめちやくちゃ元気だったじゃないか。しかも浅田飴は風邪薬であつて乗り物酔いには何の縁も無い薬じゃないか。まだお菓子食べ足りないのかよ」

甘くて美味しい浅田飴。でも今時救急箱に置いてるのか、そんなの。

「いーから、さつさと、いや、……ゆつくり行つた！」

よの子ちゃんは僕をねめつけるように言い放つ。

その隣では森乃ちゃんが心細そうによの子ちゃんを見ている。

……「ゆつくり」って何だよ？

僕が刹那、よの子ちゃんの訳の解らなさにフリーズしていると、森乃ちゃんがおずおずと口を開いた。

「私は、大丈夫だから、その、錦君は、あんまり急がなくて、良
いから。……」

森乃ちゃんまで何なんだ。

俺は曖昧に頷いて、救急箱を取りに向かった。

そんな事言われたって、森乃ちゃん怪我してるんだから、急がな
いよ。

.....
「あの、よの子ちゃんは、何か、私に話したい事でも、あるんだ
よね？」

そう訊かれて、よの子は困ったような心配そうな顔で森乃の顔を
覗いた。

「うん、につきーのいないとこでね。につきー察しが悪過ぎ」

「はは……。でも、そんな所も、私は……。その」

森乃が控えめに口元だけで笑う。

二人の間には何とも言えない沈黙が流れた。

「もつちーは、あんなのどこが良いの？」

「ええっ！」

途端にかあつ、と顔を赤らめる森乃と、それを見て、先程と変わ
らず呆れたような心配するような複雑な表情を浮かべるよの子。

しかし、よの子は「ううん」小さく唸って、森乃に向き直る。

「本題に入るけど、もつちー。『こーゆーこと』続けてると、い
つか本当に死んじゃうよ？」

物騒な言葉を口にするよの子に対して、森乃は俯くだけで何も答
えない。

「今日は擦り傷、昨日は打撲、一週間前は彫刻刀を手にブツ指し
て、どこもかしこも生傷だらけ。去年の夏休みなんかわざわざにつ
きーん家の耳鼻科に入院しに行ったんだって？私、すごく心
配してるんだからね」

森乃は震える両手で襷スカートの裾をぎゅっとつかみ、よの子の
方を見ずに蚊の鳴くような声で言う。

「だ……。だって、それはうっかり、怪我、しちゃったから……」

「うっかり……ねー。もっちーと同じ中学の子に聞いたけど、高校入る前っていうか、につきーが保健委員だって知る前はそこまで『うっかり』してなかったー……って」

話を聞くうちにどんどん脈拍があがったようで、森乃は胸を押さえながら全力疾走の後のように大きく呼吸をしている。

「それ、錦君には、言わないで……。お、願、い、だから！」

「い、言わない！ 言わない！」

よの子ちゃんは、首と両手を大きく左右に振る。「まあ、正直、何度につきーに『気付けよっ！』って言って殴ってやろうかと思っただか知れないけど」と軽口を叩くものの、表情は相変わらず、腫れものに触るかのように、ただただ困ったような笑顔をするだけだった。

「でも、あのー。そんな痛い思いしないで、普通に声掛けてみたら……」

「でっ、出来ない！ 用もないのに話しかけるなんて……」

森乃は俯いたままぶんぶんと首を振り、キノコのようなボブを揺らす。

そして、潤んだ瞳でよの子をちらりと見やった。

「よの子ちゃんには、分からないよ……」

「う……ごめん」

「……当たり前みたいに、話しかけて、仲良さそうに、楽しそうに、盛りあがってる。よ、よの子ちゃんみたいなの、明るい子には……分からないんだよ……」

よの子は森乃の必死そうな剣幕にたじろぎ、「ううっ！」と声を漏らした。

「あの、前も訊いたけど、よの子ちゃんは、本当に、錦君の事……」

よの子は心底呆れたような顔で、頬杖を突いて見せながら「はぁん」と返事をする。

「すーきーじゃーないー」

森乃は両手でもじもじと指を弄っている。

「ほ、本当ね？」

「……………」

その時、よの子は錦がバスの廊下を引き返し、自分たちの会話が聞こえるくらいの距離まで近づいて来ていたのに気が付いた。

その顔は、一見無表情で、それでいてどこか脱力していて、しかし心配そうに森乃を窺うような顔だった。

本当は優しい人の顔だった。

そんな事を考える内に、よの子はまたいつもの不敵なにやにや顔に戻り、森乃に一呼吸を送れた返事を返した。

「……………多分ね」

「うん。つて、……………え!？」

錦は黙って補助席に座る森乃の前にしゃがみ、手当を始めた。

……………

「ま、今の所は私のおもちゃっただけだねー」

戻ってくるなり俺を見ながら、よの子ちゃんがにやにや顔で森乃ちゃんに言った。

補助席の前に跪く俺と、椅子に座るよの子ちゃん。

態度だけでなく位置的にも見下される形になるのが少し癪だった。

「何の話だよ！ 明らかに俺を見ながら言ってるな！」

「さあー？ 何の話だろーねー？ ガールズトークを詮索するなんて、野暮だなーにつきーは。ねー、もっちー？」

「えっ、えええとっ、う、うん」

え。「うん」って、そんな。

……森乃ちゃんにまで野暮と言われちゃあ、素直に反省するしかない。

俺は嘆息し、黙って森乃ちゃんの骨の浮き出た膝、その傷口にマキロンを塗っていると、唐突に上からか細い声が振って来た。

「あ、あのっ」

「うん？」

絆創膏を貼りながら声のした方へ視線を上げると、紅く染まった頬をした彼女の、黒目がちな瞳と視線が真っ直ぐにぶつかった。

しかし、反射のように一瞬で反らされる。

「錦君、あ、ありがとう……」

「ああ、どーいたしまして。怪我には気をつけなよ」

窓際の席には足を組んで頬杖をついたよの子ちゃんが、何故か呆れたような顔で薄眼を開けてこちらを見ていた。

「あーあ、につきーサイテー。何にも知らないからってさー」

よの子ちゃんはプイッと窓の外を向く。

「は？ 何だよ、急に……」

よの子ちゃんは、ぶすつとした顔で、振り返り、一息に言い放った。

「もつちーの前に跪いて優しく消毒するふりをしつつ膝の間の隙間、そこから微かに覗くスカートの中の秘密の花園を見んと卑猥な表情で目を凝らしていたにつきー、サイテー」

「見てねーし。そんなに簡単に見えねーし。」

そんなにセキュリティが低いのは漫画の中だけだ。現実はその簡単にパンチラなんかする訳がない。

しかも森乃ちゃんは女の子らしくきちっと内股で座るうえ、両手はしっかりと桃の上に揃えて置くので、

……それはもう嚴重で嚴重で、内腿すら見えませんでしたよ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0563x/>

よの子ちゃんと雑談

2011年10月30日03時09分発行